小島信夫全集

3

講談社

小島信夫全集　3

昭和四十六年二月二十八日　第一刷発行

著　者　小島信夫

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二－一二－二一　郵便番号一一二

電話東京（〇三）九四五－一一一一（大代表）振替東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

定　価　一一〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

© 小島信夫　昭和四十六年

Printed in Japan

0393-135436-2253（0）　（文1）

目次

抱擁家族 5
夜と昼の鎖 148
解説をかねた《あとがき》 315

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

小島信夫全集

3

抱擁家族

三輪俊介はいつものように思った。家政婦のみちよが来るようになってからこの家は汚れている、と。

家の中をほったらかしにして、台所へこもり、朝から茶をのみながら、話したり笑ったりばかりしている。応接間だって昨夜のままだ。清潔好きな妻の時子が、みちよを取締るのを今日も忘れている。

自分の家の台所がこんなふうであってはならない。

……

しかし、しぶい顔をして俊介が台所へ姿を現したときには、彼の声だけは優しかった。

「おい、時子、この前の旅行にいく話はどうなんだい。いっしょに行かないか」

時子は、俊介から視線をそらした。そしてみちよに話しかけた。

「みちよさん、この人は私を連れて行くというんですよ。珍らしいこと」

それから時子はふりきるようにいった。

「誰が行くもんですか。この人と二人きりになったって、ちっとも面白くないわよ」

「奥さま、行ってらっしゃいませよ。私なんか主人がいないから羨ましいですわ。中年の夫婦の旅行はいいものですわよ」

とみちよが甘えたようにいった。その中年女の声をきくと、また俊介はこの家が汚れる、と思った。

「二泊ばかりだよ。講演が終ったら、二人きりになれるんだ」

「いやよ。この人は、アメリカへ行くとき、ちゃんと奥さんを連れてこいというのに、ひとりで行ったのよ」

みちよは時子のその言葉をそ知らぬ顔をしてきき流して、いった。

「でも、私ならこうして誘われたら、ハイといっていっしょに行きますわ」

けたたましく妻の時子は笑いだした。

「それより、こんど車を買ったら、自分で運転して、み

んなをのせて、私が連れてってあげるわよ」
「ああ、車の旅行も面白かろうな」
俊介はそういって、バツをあわせた。
「あんたは留守番よ。ジョージとみちよさんと、良一とノリ子とで、車はいっぱいだわよ」
「ジョージは、もう起きる頃だな」
と俊介はいった。
「そんなこと、あんたが気にすることはないわよ。あの人は、私がみちよさんに頼んで、子供の相手に連れてきて貰ったんだから」
「それは、そうだが」
俊介は苦笑した。
「僕はこの家の主人だし、僕は一種の責任者だからな」
とてれながら、俊介はいった。
「だって、ねえ、みちよさん、アメリカでは妻が家の中の責任をもつんでしょ」
「それは、そうですわ。その代り、ちゃんとしたときにはきっとだんなさまにうんと可愛いがってもらうんですわよ」
時子は、「ふん」といった表情をした。
俊介より、そう背も高くない、アメリカ人の二十三になる兵隊は、ストーブの入っているうすら寒い季節なのにランニング・シャツ一枚で台所へ姿を見せた。薄茶色の髪の毛をGI刈にしているので、小さい頭がよけい小さく見える。緑色の眼をすぼめると、何かヒョウキンなことをするという合図だ。腕は太くて、生毛が光って見え、全体が柔かくて、家の中で見るアメリカ人としては、あまり抵抗をかんじなかった。
みちよが妻にいった。
「この坊やは、クリスマスにこの家へきたいばっかりに、つい休みを一日まちがえて、営倉に入ったんだそうですからね」
「気に入ったのかしら」
「当り前ですよ。日本のちゃんとした家庭で歓待されるんですからね。ケチなくせに、お宅へは色々な物を土産にもってきますでしょ」
「ケチなんかじゃないわよ」
時子は俊介より二つ年上の大柄な女だった。いつ買ったのか、男物のピンクのセーターを着こんでいた。彼女はジョージのウィンクにこたえた。ウィンクするところをみると、自分が話題になっていることを、この男は知っているのだ。

「坊や、チャールストンをやって見せなさい」

とみちよがいった。

みちよの妹が、ジョージの後見人みたいな恰好になっている老外人ヘンリーのオンリイをしている。

「ノウ。アイ、アム、ハングリー」

「バカね、坊やは。食気のことじゃないわよ。チャールストンよ。さあ、やりなさい！　もったいぶるんじゃないよ」

台所の板の間で、ジョージは巧みに踊りだした。

はじめて時子と知り合った頃、時子はチャールストンを下宿の畳の上で、俊介にやってみせたことがあった。俊介はそれを思いだしながら、外人の踊るのを、つったって眺めていた。もともとあのヘンリーに遊びにくるようにいったのであった。それなのにこの青年がくるようになった。この男が家へきはじめてから一ヵ月になるが、いつまで続けて来るつもりだろうか。

「あら、上手だわ」と妻がいって、立ちあがった。「さあさあ、御馳走しましょう。あなたがせんだって作ってくれたスクランブルをしたげましょう」

俊介がそれをジョージに通訳をした。

妻が後姿を見せて調理台に立っているのを、ジョージの視線が追う度に、いっしょになって視線を送った。俊介は自分のさわぐ心をおさえた。

ホイットマンを知っているか、自分はハイ・スクールで習ったことがある、とジョージがいった。

ジョージはジェスチャーをまじえながら片言でいった。

わたくし、あなた、トモダチ、なります。

わたし、あなた、さがしていた。

いっしょ、話す、食べる、寝る。

「ああ、'To A Stranger' という詩だな」

「そう、そうです」

とジョージがこたえた。

その英文の原詩を俊介が時子にきかせた。時子はそれにうなずきさえしなかった。

みちよがいった。

「奥さま、坊やにダンス教えてもらいなさいよ」

「まあ、そのうちにね」

みちよはそれから、ジョージに「支那の夜」を歌わせた。

「歌詞はともかくとして、オンチだわね」

と妻がいった。俊介は自分で歌ってきかせた。そうしているうちに、彼は次第に我を忘れていった。
「あんた、よしなさいよ。こんな下らんことのおつきあいをしてないで、出かけるなり仕事をするなりしてよ。いい年をして、若いつもりでいても、もう四十五よ」
俊介は立ちあがった。
妻がそのままにしているのを見ると、俊介は隣りの部屋からちょっと、と呼んだ。
「何よ」
時子はしぶしぶやってきた。
「何って、旅行は行かないことは分ったが、車は当分買えないよ。免許をとって気の毒だけどな」
「そんなことというために、私を呼んだの」
俊介は、出かけるところが急になくなってしまったような気がした。忙しいのに昔の流行歌まで声をはりあげてうたっていたことに、腹を立てながら、その仕事である翻訳をするために、妻の部屋を通って書斎に入った。書斎に行くには、どうしても妻の部屋を通らねばならなかった。一時間ほどして俊介は外へ出る支度をはじめた。オーバーのボタンが一つ落ちたままになって、尻尾のように糸がぶらさがっていた。つけておくように、時子にいったのは数日前のことであった。俊介は廊下につったって台所へ声をかけてみちよを呼んだ。みちよが出てくると、今日でなくてもいいから、これを頼むといった。
「これに合ったボタンがないのでしたね、奥さま。そのうちつけますから」とみちよはこたえた。
二、三日して俊介は主婦相手の座談会をかねた講演会に出かけた。大学の講師をしながら外国文学の翻訳をしている俊介は、日本文学の翻訳紹介者として二年前にアメリカの大学に出張して一年間滞在した。アメリカから帰ってから、俊介はアメリカの生活について語るうちに、いつのまにか、こういうものにひっぱり出されるようになっていた。
その小旅行からもどって二週間ほどして、ある夜、俊介が家へ入ってくると、「帰ってきた、帰ってきた」と高校生になる息子の良一のいう声がきこえた。ガラス戸をあけて、応接間へ顔を出すと、テレビの前に、中学生のノリ子も、ジョージも、時子もいて、良一とジョージがビールをのんでいた。俊介は笑ってあいさつをして、彼の割りこもうとすると、ジョージがある表情をして、彼の方を見た。するとみんなが笑った。時子も、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

「ほら、こうなのよ」
といいながら、ジョージとおなじ表情をする。一体これは、何のマネだろう。時子は、
「ほら、ほら、そうでしょ」
とその表情のまま、俊介の方を指さしている。早くこたえなければならない。
「ああ、おれの顔か」
といいながら俊介は渋面を笑顔に切りかえた。いかにもよく似ている。自分に面と向ってこういう顔をするのだから、妻には底意はない、と彼は思った。
俊介はしばらくその場にいて、そのジョージが、猿のマネをしたり、山羊の啼声をしてみせたりしているのを、笑っていた。
俊介は時子の、夫の物マネを含めて外人のしてみせる百面相に声を立てて笑っていたが、その笑い声に寒気をもよおした。その笑い声はさきほど家へ入ったとき、鐘をならしているようにきこえていた。
俊介が台所で朝食をとっているときに、時子とみちよは、キャンプにある病院へヘンリー軍属を見舞いに行く話をしていた。
「軍の車をまわしてくれるんですって、奥さま」
「その日は、僕も行けるな」と俊介はカレンダーを見ながらいった。「あの軍属はジョン・ウェインとおなじ騎兵隊にいてポンユーだといっていたが、ほんとうかな」
「あのじいさんを、坊やはとっても怖がっているんですよ。営倉に入るところを、あの人のおかげで助かったんですから、どうしたって一日おいているんです」
「あなた、土産を買うから、出かける前の日にでもデパートへいっしょに行ってよ」
と時子が俊介にいった。
「ああ、いいとも、いいとも」
と俊介はうなずいた。俊介は見舞いに行きたいわけではなかったが、行かないということが、コケンにかかわるような気がした。そういう気持でいたものだから、土産の相談を時子に頼まれたとき、俊介は、ホッとした。
見舞いに行く当日になった。
「花屋へ入っていったとき、私をじっと見ている男がいるので気持がわるくなって、ふりむいたら、赤いセーターを着た学生ふうの男じゃないの。あんな年頃というものは、私なんかに興味があるのかしら」
と花屋からもどった時子がいった。

俊介が笑っていると、つづいてこういった。
「バスに乗ろうとすると、男も女もこっちを見るじゃないの。私たちの年頃で少しちゃんとした恰好をしていると、目立つものかしら」
俊介は自分の部屋へもどり、服を着てオーバーを着こむと、花瓶を手にして、ジョージの車を待つために応接間にあらわれた。そこへ化粧をなおし花を手にした時子が、みちよといっしょに姿を見せて、うつむきながら、
「あんたも行くの」
といった。
「ああ、行くよ」
と何気なくいったが、どうしておれが行かないものと思っていたのか、と俊介は思った。
キャンプに着くまでの車の中で俊介の口をさえぎるようにして時子はジョージに沿道の日本の風景を説明した。誰に対してなのか分らない。ジョージが勤務している飛行場のターミナルの応接間で、しばらく待つ事になったとき、時子のオーバーをぬがそうとすると、彼女はその手を強く払いのけてしまった。
「だって、これが礼儀なんだろう」
「見っともないわよ」
アメリカ人の将校がこっちを見ているのを知っていたので、俊介はそのまま黙って時子のそばを離れた。
花瓶に花をさしたあと、俊介は、時子の視線が、とりすましてそばに立っているジョージの胸のあたりに、向けられているのに気がついた。
「あのネクタイは、なかなかいいね」
と俊介は時子にささやいた。
「ネクタイ?」時子の顔は染った。「あんなもの、大したことはないわよ」
「そんなことないよ。なかなかいいよ」
とくりかえした。そのときふいに俊介は、あれは時子が買ってやったものではないか、と思った。身の廻りの物は、何一つ自分で買ったことがなく、すべて妻に任せきりであった俊介は、茫然とした。
時子がトイレを探していた。たしか廊下の先きにあった、と俊介はいった。先きに立って歩きだした。病院の長い廊下のどこにあるのか分らないので、俊介は廊下を見ながら移動し、ときどきあとからついてくる彼女をふりかえった。十メートルぐらい間があったのだが、二十メートルぐらいになった。彼女はゆっくりと歩いていて前方の自分の夫に無関心をよそおっているように見え

た。時々廊下の窓から外を見たりしている。彼は病院へ入ったとき、入口のあたりにたしかトイレのあるのを見た記憶があったが、玄関近くにまでやってきたとき、紳士用のしか見当らなかった。あわてた俊介は、そのことを時子に告げて、走るようにして受付のアメリカ人に婦人用のはどこにあるのか、ときいた。指された方を見ると紳士用のトイレの隣りにあった。その時までに彼女は彼のそばにきていた。見て見ぬふりをしながら、彼女は彼が受付へ走ってたずねる姿を見ていたにちがいない。彼がここにあったという前に、時子はそばへやってきた彼の手を強くはたき、怒った顔付でトイレに入っていった。受付のアメリカ人が眺めていた。俊介は、もう出てくる、もう出てくる、と思いながら妻を待っていた。時子が出てくると、彼は何メートルか先きをまた逆に歩き出した。

二、三日後、夜おそく俊介の部屋に電話がかかった。ジョージからなので、彼が応答していると、となりの部屋に寝ていた時子が、とんできた。はげしいいきおいで、受話器をとりあげ、部屋の外へ向って、

「良一、良一」

と呼んだ。俊介の方を向きなおると、つりあがった眼をして、

「これは、良一のところへかかってくることになっていたのよ。さあ、しばらく待つようにいってちょうだい」

「だって、僕が出たっていいじゃないか」

「あんたは、そんなことにこだわることないのよ」

その見幕におそれて、俊介がいわれた通りにすると、妻は電話を別の部屋に切りかえた。大した電話ではなさそうなのに、何をいきりたつのだろうか。明日からまた外へ仕事をしに行こうというのに。

第一章

「だんなさまが二週間ぶりでお帰りになりました。これで、翻訳の脚本が出て、まとまったお金が入りますわよ」

と台所でみちよがいって立上ると、時子も立った。俊介が腰かけている居間に、時子の物が入っている洋ダンスがあった。時子は黙って入ってくると、着換えをはじめた。こちらに背中を向けたままで、

「このスカートの方が似合うかしら」

「さあ、その方がいいと思うね」

時子はスリップを股の間にはさんで、腰をよじりなが

ら、こげ茶色のタイトのスカートをはいた。
鏡の前で姿をうつしながら時子は呟やいた。
「やっぱりこっちの方がいいようね」
俊介は庭へ出て紐つきのゴルフ球をうちはじめた。
みちよが、だらしのない恰好でふき掃除にかかりながら、
「奥さま、紐つきでうまく打っているように見えても、かえって悪いクセがつくんですって」
といった。みちよのその言葉には、時子はこたえなかった。時子は、しばらく、出かけようかどうしようか迷っているように見えた。それを見ながら俊介は庭からみちよに声をかけた。
「うまく打っていれば、どこへ行ったってうまく打てるさ」
時子が出て行くと、荷物の整理をしている彼のところへみちよがよってきた。ちょっとお耳に入れておいた方がいいと思うのだが、あるいは黙っている方がいいのだろうか、とみちよがいった。どっちを選ばせるつもりか、と俊介は睨んだ。次の瞬間、ああ、分った分った、分った、と三度叫び、分っているから話せ、といった。
「だんなさま、奥さまがジョージと……」
俊介はみちよの言葉をぼんやりときいていた。それから、もうよせ、お前が時子に電話して帰るようにいえ、いや、僕がそうする、と俊介はたてつづけにいって受話器をとりあげた。
「はい、はい」という時子の明るいおちついた声がした。
第三者の前ではそういう声を出すのだ。俊介は時子がもどってくるのを外に出て待っていた。時子が角をまがってうつむき気味にやってくると、俊介は自分から近づいて、「ちょっと家へ入れ」といった。時子のあとについて家へ入った俊介は、時子の背中を押してソファの上へ倒してしまおうと思った。一刻も早く家の中へ入れてしまおうと思った。時子のあとについて家へ入った俊介は、時子の背中を押してソファの上へ倒して
「お前、何をした」といった。「何よう」といいながら時子が起きあがった。これから何をいい、何をしたらいいだろう。そういうことは、どの本にも書いてはなかったし、誰にも教わったことがない。
「お前があの男としたことは、全部きいた。お前は三時間もあの男をはなさなかったそうじゃないか」
俊介はまだ半分倒れたままになって自分を眺めている時子の髪の毛の中に手をつっこんで一にぎりにぎると、身体をひきずりあげた。それからまた転がすように倒し

て、拳骨で二つ三つなぐりつけた。
　時子は髪に手をやりながら、
「誰がそんなこといったのよう」
「みちよがいったんだ」
「みちよが？」
　時子は頬をおさえながら考えこんだ。
「おれが最初から嫌いなみちよがそういったんだ」
「どうして、みちよが……」
「ジョージがみちよにいったんだ」
「ジョージが？」
　俊介は大きな声でいった。
「これからのお前が、あの男にはこわいのだそうだ」
「私はそのうち話すつもりでいたのよ」
　時子は呟やくようにいった。
　俊介はうつろに笑った。
「さあ、出て行くか、どうするんだ」
「これは私の家よ。私が苦労して建てた家よ」
「もうお前の家じゃない」
「おねがいだから、そうわめかないでよ」
「………」
「こういうときにあんたがわめいちゃ、だめよ」

と時子がいった。
　俊介は時子をそのままにして奥へ入った。
「だんなさま」
　とみちよが寄ってきた。
「だんなさま、どうして奥さまに話されたんですか。胸にたたんでおくものとばかし思ったんで話したんですよ。奥さまにどうなさったんですか。夫婦生活の座談会に出たりなさるから物分りのいい方だと思って話したんですよ。奥さまだって、先生は理解があると思っていらっしゃるんですよ。だから……」
「だから、ああいうことをしたというのか」
　俊介は息をはずませた。
「きみは、向うへ行っていたまえ、よかったら荷物をまとめて帰るがいいよ」
「何でございますか」
　いつものように言葉だけは叮嚀だが、みちよは、顔をあげ、彼を睨んだ。その顔は真赤になっていた。これはいけないと警戒しながらも、彼はいった。
「きみまでもいっしょになって、毎日そんなことばかり茶のみ話にしていたんだろう」
「私はひきとらせていただきます」

「いいかね、これは僕がそういったのだ。家内とかんけいなく、僕がきみにそういい、それできみは帰るのだ。これからは一切僕の命令の通りにする。きみはおれのいう通りにするのだ」
俊介はわざと時子にきこえるようにいった。それによって、みちよを宥めたつもりだった。
「私は誰にも命令されません」
みちよはまた顔をあげて、こんどは軽蔑したように口をゆがめ大ゲサに肩をゆすぶって笑いだした。
「いいか。ヘンリーさんにもいってくれ。どうしてあんな男をこの家へよこしたのだとね」
俊介は応接間へ引返した。ヘンリーがよこしたとは俊介も思っているわけではなかった。時子は頬に手をあてたまままぼんやり考えこんでいた。
「お前は、この三ヵ月というものは、計画的に事をはこんだのだ、あの男を家に入れたのもそのためだ、お前のたった一つの取柄は正直なことだとおれは思っていた」
俊介は感傷的になった。
「その一つをお前はすてたのだよ」
「計画的ってことはないって」
「みちよがそういった」
「あんた、バカね」溜息を洩すようにいった。「ほんとにしようがない人ね」
「みちよはその様子が前からあったのだが、おれもその様子に気がついているものと思っていたといった」
「ちがうわよ。そんなことないって」
「お前は黙っていたよ。黙ってこれからも続けようと思っていた。そうだろう? それでいて、さっきもおれにスカートを選ばせたり出来るんだからな」
「あんたがみちよの前でそんなことといえば、みちよがいったことがちがっていないことを証明するようなもんじゃないのよう」
「何だって」
「そうじゃないの、あんたとみちよの二人がそういえば、私がほんとにそうだったということになるじゃないの。そうなったときには、バカを見るのはあんたよ。妻にそのことをさせるのは、妻が夫に対して不満のためということになるでしょ。ほんとに見っともないったらありやしないわよ」
「そうか」
と俊介は心の中で呟やいた。
「あんたは自分を台なしにしてしまったのよ。それなの

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c